

## 読みふける茶房の一人春日射し 星爽風

早春の日が射す茶房の中は、時間が止まっている様な静かなひと時。近頃では、窓のないビルの一隅にある喫茶店が主流で、そこでも携帯メールが行き交ったりしていて落ち着かない。

## 1月18日の新年会（しゃぶ禅）

22名の出席があって、最近にない盛会でした。心臓外科で入院療養中だった西村さんもすっかり復帰して元気に乾杯され、カラオケにまで同行されました。心臓外科も脳外科も、医術が進歩しているのでなかなか死ねません。OB会栄えあれ！です。

今回は例会の「常連」がほぼ全員参加といったところでしょうか。昼食会に限らず、体力と相俟って、酒量も極端に減りましたが、こうして何となく集まるのです。

会社から参席の杉田Mが「不払いのことで先輩にもご迷惑をおかけして・・・」という挨拶がありましたが、これが報道等では言われている様な、損保の構造的な問題だとすると、先輩こそが後輩に迷惑をかけているのではないのか、と思ったりもします。良いにつけ悪しきにつけ、先輩の足跡は消えないものですねえ。



懸案の夕食会については、当面様子を窺いながら、3月も従来どおり行うこととしました。お互いに会う事に意味があるので



すから、酒量などは気にしないで、のんびりと歳相応にご自分のペースで是非。

## 3月の行事など

\*\*\*二金会是水曜日に\*\*\*

幹事会

3月14日（第二水曜日）4時、コーナー

19年度支部総会の準備他

上記終了次第“二水会”（仮称）

幹事以外の方でも、4時30分位にコーナーで合流して下さい。

金曜日は、働いている人々の「花金」で店が混み合います。我々が世間様の邪魔をしてはイケナイのです。そこで水曜日に。

この水曜日の会の名称を募集します。

みちのく幹事会

3月23日（金）2時～於協会

他は別途通知があります。

## 3月の例会（夕食会）

めんはんちん

中嘉屋食堂 麺飯甜 722-2801

日時：3月22日（木）5時～

会費：4000円

前回に同じ、仙台駅の1階です。

出欠のご連絡を、3月9日（金）までに、木村さんまで。 227-2131

長井照子さん(長井輝夫さんの奥様)から

優太君に贈り物



中 越地震での土砂崩れの現場から、幼い優太ちゃんが、オレンジ服のレスキュー隊に奇跡的に救出される感動の場面を詠んだ短歌、「抱きかかえ抱きかかえられて救われるオレンジ服の中で幼なは」(茅ヶ崎市の富沢真氏作)を、平成16年12月の支部便りで紹介したことがありました。そして、優太君は五つになりました。

20年来人形作りを趣味にしている長井照子さんが、河北新報主催の工芸展での入選作“翼の折れたエンジェル(高さ90センチ、重さ15キロ)”と、“再び、真優ちゃんに捧ぐ(高さ75センチ、重さ20キロ)”の石膏人形2体を、優太君に贈呈すること

になったという記事が、河北新報と新潟日報に掲載されました。

長井さんは新潟出身で、土砂崩れがあった長岡市にも住んだことがあり、優太ちゃんと同じ年のお孫さんが居ることなどで他人事と思えなかったことが、真優ちゃん親子への鎮魂の念と、優太君の健やかな成長を願う熱い思いとがこもった、入魂の作品を生みました。

「再び、真優ちゃんに捧ぐ」はXマスプレゼントとして贈られ、「羽の折れたエンジェル」の方は、この春に、長井さんが直接優太君を訪ねて手渡すことになっているそうです。



羽の折れたエンジェル(左)と  
再び、真優ちゃんに捧ぐ(右)





## 俳句で思うこと

佐々木圭舟

朝顔に釣瓶とられてもらい水 加賀 千代女

私の好きな俳句の一つである。朝起きると井戸の釣瓶に朝顔が巻きついている。今はすっかり見ることも出来ないが、昔の井戸は外にあり釣瓶井戸だった。水を汲むとなると釣瓶を操作しなければならない。そうすると、朝顔のつるが切れてしまう。可愛そうだ。そこで水汲みを諦めて隣に水を貰いに行く。釣瓶に巻きついた朝顔のことを説明して水をもらいに来たことを伝えると、隣人もまた快く水を分けてくれた、という状況が浮かび上がります。朝顔に対する思いやり、命の大切さ、人のやさしい気持ち素直に表現されていて感動してしま

います。

世の中が平和であることは勿論です。平和な世界が近所付き合いのなかにも表れています。

俳句は、短い表現のなかに意味するものが奥深く、味があるのですね。

よい俳句とは、説明句ではなく、省略のなかから情感を膨らませた言葉をさがすことなのかもしれません。

句作で大事なことは、事象を的確にとらえ、分りやすく表現し、季語を生かす言葉

の彫琢<sup>ちやうたく</sup>ではないかと思うこの頃です。

## 白井さんの絵

白井さんが絵筆をとられていたので、その事と、その作品にビックリでした。

お酒だけが特技なのでは、などと考えていたとすれば、それは大きな誤解なのです。お酒はその時代に欠かせなかった、仕事上の嗜みにすぎないのであります。

絵のきっかけは菊。退職されてから庭で観賞菊を育てて、社員や退職者を呼んで「観菊会」なるものも催していたそうです。勿論少々(?)潤滑油も付随した模様ではあります。

そして今より10余年前から、その菊の絵を描き始めたのでした。

菊以外にも季節毎の作品があるので、今後「便り」で頼りにさせて頂くことにしました。

今回は季節柄、梅二点。力強いです！





北の旅 千葉繁明

冬に旅をした。

札幌から乗り換えた稚内行き特急「サロベツ」はひたすら白い原野を北に向かっていく。車窓を流れる景色はあまりにも寂しく美しい。白い丘のカラマツ林を包み込む夕映えのモノトーン。じっと見続けた。こんな光景を一枚の絵に描き旅の想いを短歌に詠んで見た。(06年12月)

*カラマツのモノトーンに染むる白き丘北の大地の白夜のしじまに 繁明*

北海道最北の情景を日々歌に詠んでいる、稚内の中学校教師、藤林正則氏が詠んだ歌がある。

「サハリンを望む丘のうへ放牧の牛千頭を照らす満月」

稚内の丘の上から見た光景と「心に抱く宗谷への思いを」お題の「月」に絡めて詠んだ歌である。1月15日新春恒例の「歌会始の儀」が皇居で行われ、天皇、皇后両陛下の御前で読み上げられた入選作である。